

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のある問題は句読点を一字に数えます。

学生の時に将棋を指していましたが、アマチュア強豪にはA齒に〇〇着せぬ物言いをする人を見かけました。私が所属した大学の将棋部でも、一般の会話では聞いたことがないような辛辣な言葉が飛び交っていて、私もたびたびそういった辛辣な罵倒の対象となり、悔しい思いをしなかったと言えは嘘になりますが、私はそんな将棋指したちのことが、結構好きです。

①将棋の世界は「優しい嘘」が通用しない、というか、有意義に機能しない場所です。詰みがある②ギョクメンでは、誰がどう言ってもそれは詰んでいるのであり、それを読めなかった人は弱いのです。それ以上でもそれ以下でもない。将棋に勝った人が負けた人に向かって「指そうと思つたら、隣のコマに指が当たって動いて、それがまたまた好手になりました」とか、「全部、良い手を指されたのに、私の勝ちになつていて、一体どうなってるんでしょね」とか、B齒の〇〇のようなことを言ってみても、嘘がバレバレで軽蔑されるだけです。たとえいくら辛くとも、本当のことを言わなければ、負けた原因がわからず、相手も自分も将棋が強くない。だから将棋指しは知らず知らずのうちに、本当のことを言つてしまう癖がついています。

しかし、そういった将棋指しの習い癖は、「外の世界」に出ると一定の頻度で問題を引き起こします。それは私の人生において時に起こってきたことであり、一部の将棋部の先輩後輩諸氏を見ても容易に想像できることです。本当のことを言い過ぎると、ある種の社会不適応者というCらしく印をおされてしまうのです。それは、この世には本当のことを言われると困る人が結構たくさんいるし、一面的な「本当」を主張するだけでは解決しない問題も、現実にはとても多く存在しているからです。

中国の有名な故事成語に「鹿を指して馬となす」という言葉があります。これは秦の始皇帝亡き後、権勢を誇つた宦官の趙高に関する逸話です。趙高は幼き二世皇帝の胡亥を傀儡にして帝国の実権を握つていましたが、ある時胡亥に「珍しい馬がおります」と鹿を献上しました。胡亥が「これは鹿ではないか」と問うと、趙高は「いいえ、これは珍しい馬でございます。皆はどう思うか？」と周囲の家臣に尋ねました。これは群臣の自分への忠誠心を試すために行つた趙高の策略で、鹿だと答えた家臣は、軒並み捕らえられて処刑されたそうです。一説には、これが馬鹿の語源となつたとも言われており、鹿を馬というのにはバカなことというふうにも、そんな状況がバカけているというふうにも解釈できる話です。

現代ではさすがに処刑されることはないですが、本当のことを言うことで、自分が属する組織が困つたことになったり、関連する人との人間関係が悪くなったり、あるいは自分の評価が下がつたりというような状況は、古今東西ごくごく普通に発生します。だから、多くの人がそのバカな状況をどうにかこうにかやり過ごしています。言う必要のない本当のことは黙つていたり、わからないとか、知らないことにしたり、あるいは聞き直つて嘘を言うこともあるでしょう。ある国の総理大臣は国会で118回も嘘の答弁を行い、その理由を「秘書が本当のことを知らせなかったから」と説明しました。私はこの総理大臣が少なくとも119回の嘘をついたのではないかと思います。本当のことが言えない、もしくはとても言いにくい状況というのは、このように現実には頻繁に起こります。

「嘘をついてはいけません」。D物心ついた時から、私たちはそう教わり続けます。幼稚園でも、小学校でも、中学校でも、そして大人になつても。しかし、この世は「嘘」、少なくとも「本当でないこと」に満ち溢れています。その中には鹿を馬というような自分を守る嘘もあるでしょうが、必ずしもそういうものばかりでもありません。

灰谷健次郎さんの『少女の器』という小説に、主人公の紺と上野くんという少年のこんな会話が出てきますが、私はこのくだりをとても印象深く覚えています。

……(中略)……

「頭のええ人間ちゅうのはやっぱり冷たいワ。ドブに落ちた犬見て、あの大汚い、汚い、いうたら犬かて立つ瀬ないワ。おまえ、なんで、おれを覗むねん」

紺は唇をかんでいる。
世の中には、それが本当であっても言わなくていいこと、本当のことを言うことで③ジタイが良くなること、そんなこともたくさんあります。「優しい嘘」が人としての生きる知恵であり、④必要悪として存在していることは紛れもない事実です。そこで「いや、だつてあの犬、汚いやんか」と言つてしまふのが、将棋指しだつたりするのですが、「優しい嘘」というものが、本当に悪いことなのか、どこまでが許されるのか、私にはよくわかりません。

将棋の世界で「優しい嘘」が有効に機能しないのは、結果が短期間に出る、良し悪しが明白な世界だからだと思います。勝ちに導く手が好手で、負けにしよう手は悪手です。しかし、現実の世界はそんな単純にはできていない。ドブに落ちて泥にまみれる経験をするのが、その後の人生の成功につながっていくようなことはよくある話です。ドブに落ちたら負

け、ではないのです。だから、ドブに落ちたことを責め立てるより、その傷を癒し、心も体も回復させていく「優しい嘘」の方が長期的な、好手、となることだつてあるのです。

また、嘘はいけないと言つても、鹿を鹿と言えは首をはねられることがわかつている状況で「鹿！」と言ふのは、実際馬鹿なことではないのかと、思わぬことかもしれません。映画やドラマであれば、そういう馬鹿な正直者を助けてくれるヒーローが出てきたり、その人がヒーローに変身できたりするのですが、現実にはそんなことは起こりません。E物言えばくちびる寒し秋の風とは、けだし名言です。

③では一体、なぜ私たちは嘘をつくことがいけないと教わり続けているのでしょうか？ その本当の問題は、安易に嘘をつく生き方、その生きる姿勢にあるのではないかと、私は思います。生きていくと、いろんな苦しいことがやつてきます。志望校に入るために勉強することや試合に勝つためのスポーツの練習もそうでしょう。与えられたノルマをこなすことや、何かの仕事を成し遂げるなど、苦しい思いをしなれば達成できないことが多くあります。もちろん中には、そうやって頑張つてみても越えられない困難もあるでしょう。結果が失敗に終わること⑤ジタイは決して悪いことだと思いませんが、私がここで問題にしているのは、そういった困難や苦しさや真剣に向き合わず、安易に逃げてしまうことです。それは心理的な癖のようなものになり、人として成長するための大切な基盤を蝕んでいきます。

嘘をつくという行為は、そういう困難や苦しさから逃げてしまうことと根が同じだと思えます。嘘をつけば、目の前の問題がとりあえずその場では解決します。でもそんなやり方が当たり前になつてしまうと、人はいざという時に頑張れなくなつてしまふ。いつも何かを誤魔化して生きること慣れてしまふのです。そういった精神の在り方が、その人の人生全体を何か偽物にしてしまふ。嘘にはそういう魔力があり、そこに堕してしまふことを戒めるために、聖書も、コーランも、先生も、親も、口をそろえて「嘘をついてはいけない」と言うのです。

嘘や不善とまったく無縁のヒーローのように常に⑥カツコウよく生きることは、⑦ナミの人間にはなかなか難しいことです。でも、「はーい、趙高さま、それは馬でございます」と魂を売つたような生き方をするのも、やつぱり違う。私たちはそのはざまで、ちよつとカツコウ悪く、でも頑張つて生きて行く。④そんな生き方しか残されていないのではないかと、そんなふうにも思つたりもするのです。常に理想を追い求めていけば良いというほど世界は単純ではないけれど、それは理想を忘れてよいということとは、やはり違うのです。

だから、いつも鹿を鹿と言う必要はないのかもしれないけれど、もしたとえ、自分が馬の分類の専門家だつたら……、そう、もしそうなら、やはり「鹿！」と言おうと思ふのです。人生にはそういうことが必要なことはあるし、馬鹿になつても悔いがない、と思えるようなものを持つてない人生は、なんだかつまらない。私は⑤将棋指しの端くれとして、そう思うのです。
(中屋敷均『わからない世界と向き合うために』による)

※(注)

秦…中国の王朝名。宦官…妃たちに仕え、君主に重用された男子。
趙高…人名。胡亥…人名。傀儡…あやつり人形。

「頭のええ…」…ある人物を紺が責めた際の上野くんの言葉。

問一 A、Bは「歯」という語を使った慣用的表現です。〇〇に入るひらがなを記しなさい。〇ひとつにはひらがな一字が入ります。

問二 C「らく印をおされ」る、D「物心ついた」、E「物言えばくちびる寒し」のここでの意味をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

C ア 不名誉な決めつけをされる イ 保証がされる
ウ スタートを切られる エ 広くうわさされる

D ア 身体も精神もしっかりとする年齢になった
イ 親や故郷が懐かしく感じられる年齢になった
ウ 人を思いやるやさしさが身につく年齢になった
エ 世の中の物事が分かりはじめる年齢になった

E ア 現実とは口で言うほどあまくないものだ
イ 余計なことを言うとい災いを招くものだ
ウ 言いわけは重なるほど白々しくなるものだ
エ 何を言つても通じないのはつらいものだ

問三 ①のように筆者が考えるのはなぜですか。それを説明した次の文の空欄に入る適当な言葉を本文から二十字以内でぬき出しなさい。
将棋の世界は()場所なので。

問四 ②「必要悪として存在している」嘘として「優しい嘘」以外にどんな嘘がありますか。本文から六字でぬき出しなさい。

問五 ③の問いに対して筆者はどのように考えていますか、説明しなさい。

問六 ④とはどのような生き方ですか、説明しなさい。

問七 ⑤と筆者が考えるのはなぜですか、説明しなさい。

問八 ⑥⑦のカタカナを漢字に直しなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「わたし」は十二歳で、修道院の寄宿学校の生徒である。宗教の時間、先生が朗読していた文章の単語のすべてを、ふざけて二、三箇所ずつ変えてノートに書き取っていたところ、先生に見つかってしまった。「わたし」は、先生に怒られ、ひどく気まずい状況になってしまう。

約一週間後、校長がわたしの退学処分を思いとどまり、もう一度チャンスを与えることにした、という連絡があった。校長はわたしの両親に手紙を書き、学校に来て、娘にしっかりと見せしめのための罰を与えるように、と伝えたのだった。

その後の数日間は、ほんとに苦しかった。自分がこんなできそこないの娘であることを、両親に対して心から申し訳なく思った。夜、ほかの女の子たちがとくに眠っているときも、わたしは一人で泣いていた。そして、すすり泣く声がうるさくならないように、枕の端を口に押し込んだ。

どんなことになるんだろう、とわたしはあれこれ想像した。ひよつとしたら母が来るかもしれない。①その方が都合がいいように思えた。面会室で二、三回、びんたをくらわされるだろう。それから半日がみみ文句を言われ続けて、わたしはすっかり小さくなり、Aベそをかいでしまっだろう。そして別れるとき、母は怒った顔をしながらも、キスをしてくれるだろう。そうして、すべてが丸く収まるのだ。

でも、もし父が来たら？

父はこれまで、わたしにB手を上げたことはなく、いつもかばってくれて、「この子はもう悪さはしないよ」と言ってくれていた。それなのにこんな失敗をしかしたわたしへの失望に、父はきつと耐えられないだろう。飼犬が言うことを聞かなかつたりすると父がどれほど憤るか、わたしはよく知っていた。今回は、父の正義の怒りがわたしに向けられるのだ。もしかしたら父は全生徒の前でわたしにお仕置きをするかもしれない。あるいは、わたしを家に連れ戻して、二度と学校には来させないかもしれない。

想像のなかで、くりかえし不穏なイメージが浮かんできた。わたしは掛け布団を頭からかぶり、死にたいと願った。

日曜日の午前、自習時間中に、玄関の受付をしているシスターが突然やってきて、わたしを面会室に連れていった。入ろうとしたとき、寮母さんが面会室から出ていくのを見た。つまり、もう全部話したということだ。

心が石のように重くなった。足を引きずりながらゆつくりと入室した。父が部屋真ん中に立っていた。②懐かしい大柄な姿が、きょうはわたしを不安にさせた。すぐに叩かれるのかな、と思い、ためらいながら近寄っていた。

何も起こらなかった。父はいつもどおりわたしを抱き締めて、外出の許可が出たから着替えておいで、と言った。

急いで自分の部屋に駆け上がり、白いセーラー服に着替え、新しいリボン

を左右のお下げに付けた。

父と一緒に路上を歩いていくわたしを、少女たちは窓から意地悪く、いい気味だというように眺めていた。また不安が募ってきた。街のなかで罰を受けることになるのだろうか？

父は学校や友だちについて、あれこれと質問を始めた。もうすぐお仕置きが始まるんだろうな、と思っただけで、そんな危険はほとんど遠ざかっていた。

わたしたちは少し街を見て歩いた。おもちゃ屋や本屋のショーウィンドウに並ぶ品々に、わたしは目を見張った。昼の十二時、わたしたちは大きな食堂に入り、父がカツレツと、そのあとでケーキも注文してくれた。わたしはあいかわらず、父の目をまともに見ることができなかった。でもときおり、父が奇妙なほほえみを浮かべているように思えた。

急にひらめいた。ここで、お父さんはわたしを罰するのだ。みんなの目の前で。そうならもう生きていけない、とわたしは考え、ケーキをつつき回した。

でも、またしても何も起こらなかった。それどころかワインをちよつと味見することさえ許された。ワインはたいして美味しなかったけれど、とてもぜいたくな気分になった。

食事のあと、父は少し眠気が差したようだった。わたしたちは公園でベンチに腰を下ろし、日光に背中を照らされていた。

噴水の周りに植えられたバラが、ちょうど咲き始めていた。じつと座つていられなくなったわたしは、バラからバラへと歩き、匂いを嗅いでみた。一番甘い匂いがしたのは、大きな深紅のバラだった。黄色い花卉の上に、緑のコガネムシがとまっていた。

父はうたた寝していた。列車に乗ってきて疲れたのだろう。街までやってくるのは、毎回一苦労なのだった。街に来る際の面倒な手続きすべてを、父は忌み嫌っていた。

あらためて、後悔の気持ちに襲われた。わたしのせいで、父はそんな苦勞をしなくちゃいけなかったのだ。我が家の梨の木の下で穏やかに座っていることもできたはずなのに。いずれにしても、わたしはできの悪い娘なのだ。そのあと、わたしたちは映画館に行った。映画を観るのは初めてで、内容

はよくわからなかった。

スクリーンでは不幸な様子の男がソファに座って、口ひげを噛んでいる。ぎよつとするほど痩せた若い女が彼の周りでずつと踊っている。その間に、とりわけ頬の赤い若い男が登場しては、みんなから平手打ちをされていた。お父さんが今回の訪問の目的を思い出さないといいな、とわたしは思い、父を横目で見た。ところが父は心から楽しそうに笑っていて、暗い計画をい

だいているように見えなかった。わたしにとつては、その映画に笑えるところなどなかったのだけれど。

頬を腫らした若い男が、きのどくに思えた。③彼が見かけどおりの健康体なのかどうか、誰にわかるだろう？元氣そうに見えるのは、単に頬が腫れているからだけかもしれない。

いずれにしても、その映画は良心に咎めのない人々のために作られていた。映画が終わったとき、わたしはほつと息をついた。

もうすぐ五時だったので、駅に行かなければならなかった。駅まで歩いてきてもいいと言われ、公園を通っていくあいだに、父は慌ただしく、家での最近のできごとを話してくれた。弟が梨の木から落ちて、くるぶしを挫いた。灰色の猫がいなくなった。わたしのお気に入りの雌牛は七月に子どもを産む予定だ。でもそのころには夏休みになっている。

わたしはただ片方の耳だけで父の話を聞いていた。ふいに、恐ろしい考えが浮かんできた。わたしは駅でひっぱたかれるのだ。

もちろんそうに違いはない！そのことに思い当たらなかったなんて！わたしを辱めるには、最高のチャンスだ。乗客たちは列車の通路に押し寄せ、窓越しにこの珍しい見せ物を楽しもうとするだろう！それなのに父は平然と、斑の牛の話なんかしているんだ！わたしはほとんど憂鬱になり、口数が少なくなった。

しまいに父は、わたしの背中をぽんぽん叩きながら言った。「元氣を出すんだよ！四週間経ったら、また家に戻れるんだからね」

わたしは父に向かつて無理にほえんだけれど、父の言葉はなんの慰めにもならなかった。髭を生やした大柄で強い男ならば、元氣でいるのはたやすいことだ。どんな人間も、彼を叩きのめしたりできないのだから。

駅のホームでは年老いた女の人が、大粒で赤黄色のさくらんぼを売っていた。父はふとその前で立ち止まり、大きな紙袋にさくらんぼを詰めてもらった。そして笑いながら、わたしの手にその紙袋を押しつけた。わたしは言葉が出てこなくて、お礼も言えなかった。

列車はもう入線していた。父はもう一度しっかりとわたしの背中を叩き、頭を撫でると、列車に乗り込んだ。

列車が走り始めたとき、父は突然、窓から大声で言った。④「ああ、言っておきたかったのは、宗教の時間にやつたようなおふざけはもうやめにするつてことだよ、わかったね！」

それから父は青と白の大きなハンカチを取り出し、わたしの姿が見えなくなるまでずつと振っていた。

わたしはホームで⑤さくらんぼの袋を胸に押しつけて立ち、激しく泣いた。それからさつと線路に背を向けると駅の出口を駆け抜け、路上に出た。これほど恥じ入り、これほど幸せだったことは、これまでになかった。

(マルレーン・ハウスホーファー著、松永美穂訳「さくらんぼ」による)

問一~~~~~A「ベそをかいでしまっ」、B「手を上げた」とありますが、後のaとdの○にひらがなを入れ、「かく」と「上げる」を用いた慣用表現を完成させなさい。○ひとつにはひらがな一字が入ります。

a ○○をかく……苦勞する。がんばる。

b ○○○をかく……あるものにとよつて、のんきに構える。

c ○○を上げる……何かに夢中になる。

d ○○に上げる……問題にせずにはうつつおく。

問二——①とありますが、なぜそのように「思えた」のですか、説明しなさい。

問三——②とありますが、どういうことですか、説明しなさい。

問四——③とありますが、なぜこのように思ったのですか、説明しなさい。

問五——④とありますが、父が最後になるまでこのようなことを言わなかったのはなぜですか、説明しなさい。

問六——⑤「さくらんぼ」は「わたし」にとってどのようなものですか。本文全体をふまえて、説明しなさい。

考查番号